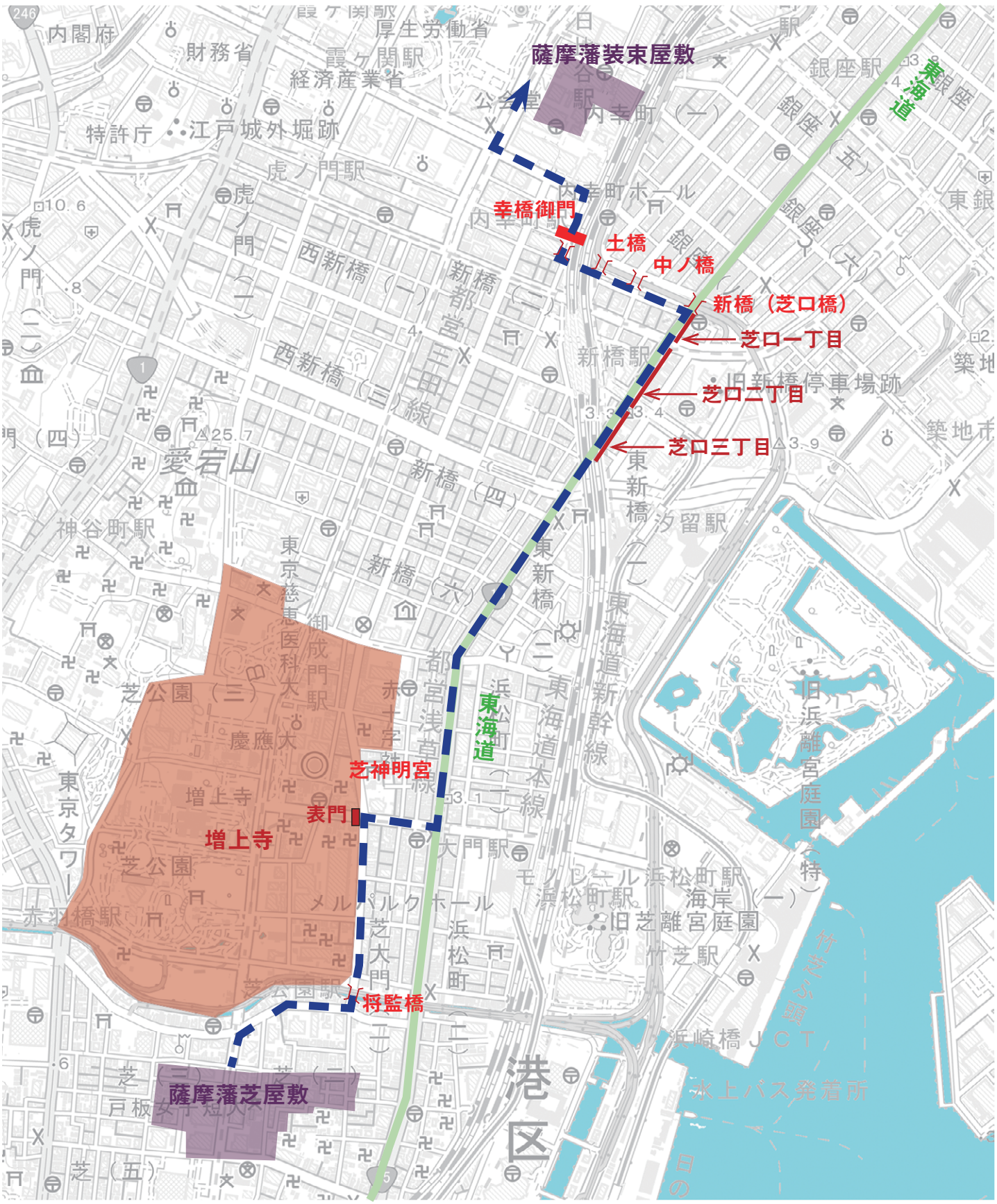
1　参考地図（1）琉球使節の登城ルート（部分）



0　500　1000　1500

※本地図の作成には、国土地理院発行の電子地形図 25000 を使用した。

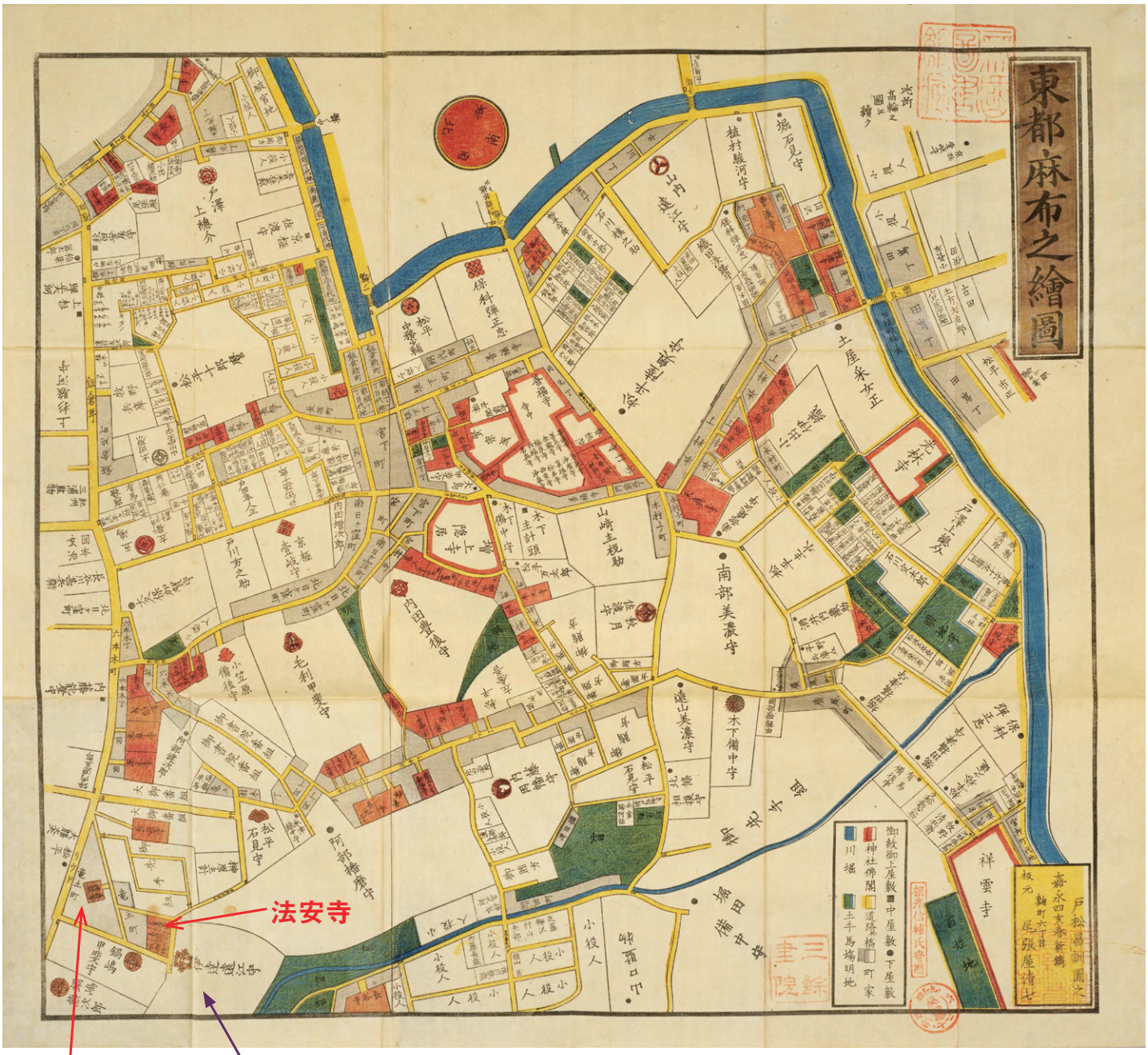
『尾張屋板江戸切絵図』より「芝口南・西久保 愛宕下之圖」 嘉永３年（1850）刊

（国立国会図書館蔵、デジタルコレクションより）［請求記号：本別 9-30］

江戸のような大都市では、地域ごとに分割した、携帯に便利な切絵図が発達した。幕末には近江屋板・尾張屋板・平野屋板が相次いで刊行され、特に尾張屋板は多色摺、寺社の絵画的表現などにより人気を博した。本図では愛宕山・芝増上寺を中心とした芝一帯を描く。薩摩藩芝屋敷を出た琉球使節は東海道を北上し、幸橋御門より城内に入り、同じ道筋を戻った。城から出て、東海道に入ってすぐの芝口を通過している場面が、本絵巻の「主役」である。

2　参考地図（2）宇和島藩上屋敷

※本地図の作成には、国土地理院発行の電子地形図 25000 を使用した。

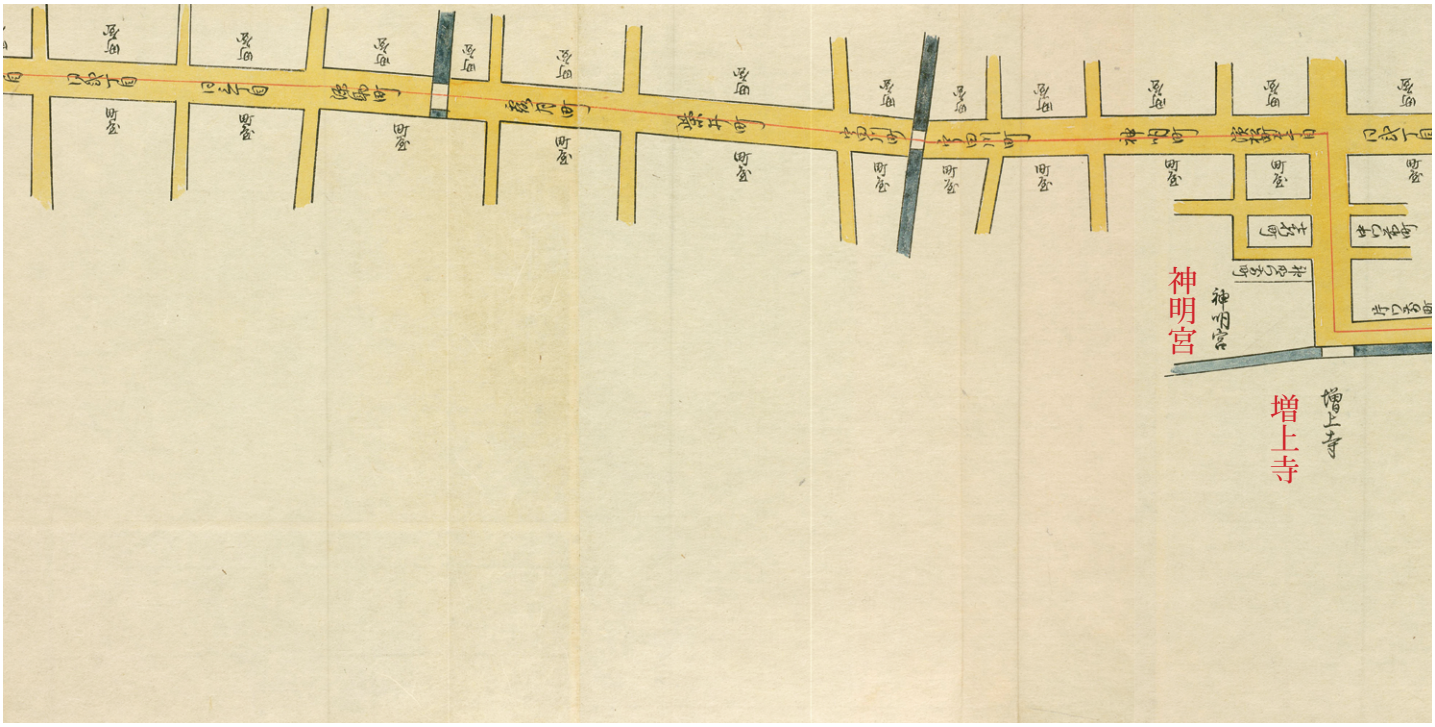


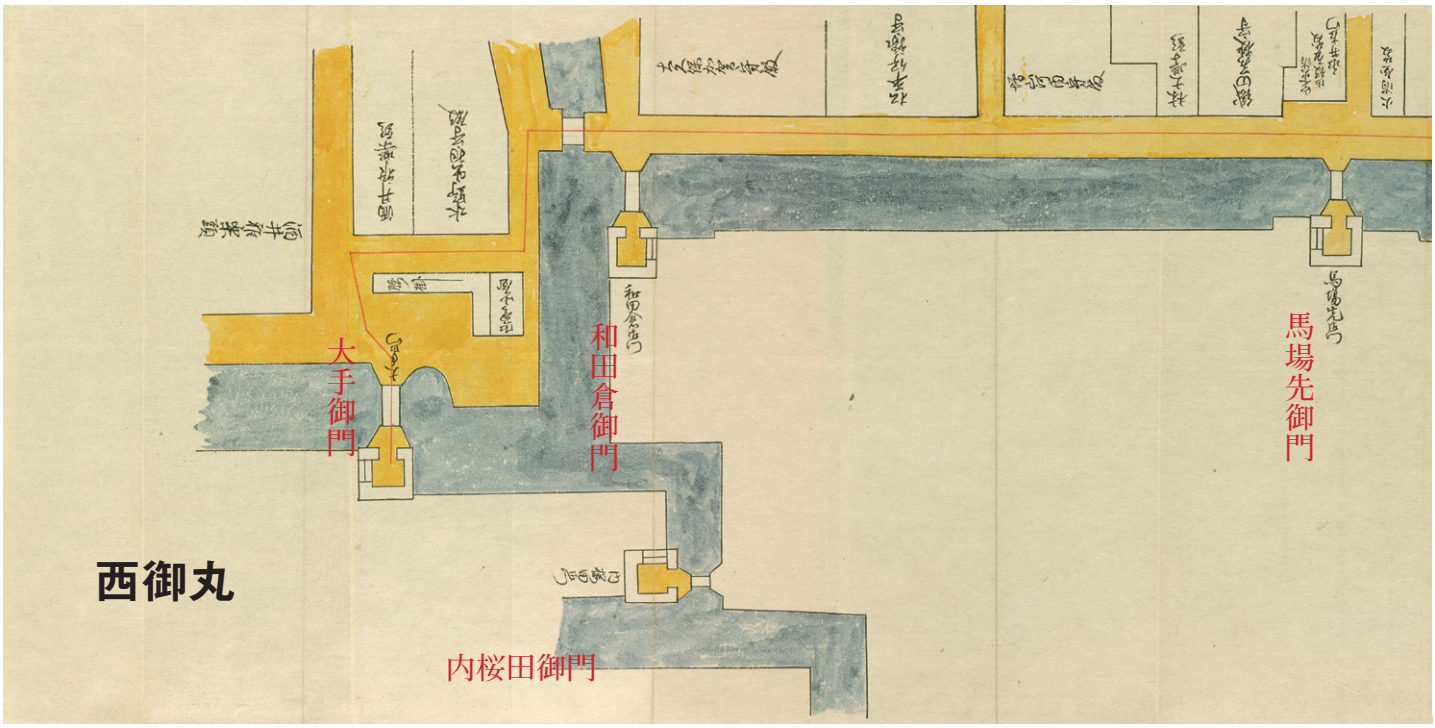
『尾張屋板江戸切絵図』より「東都麻布之繪圖」　嘉永４年（1851）刊

（国立国会図書館蔵、デジタルコレクションより）［請求記号：本別 9-30］

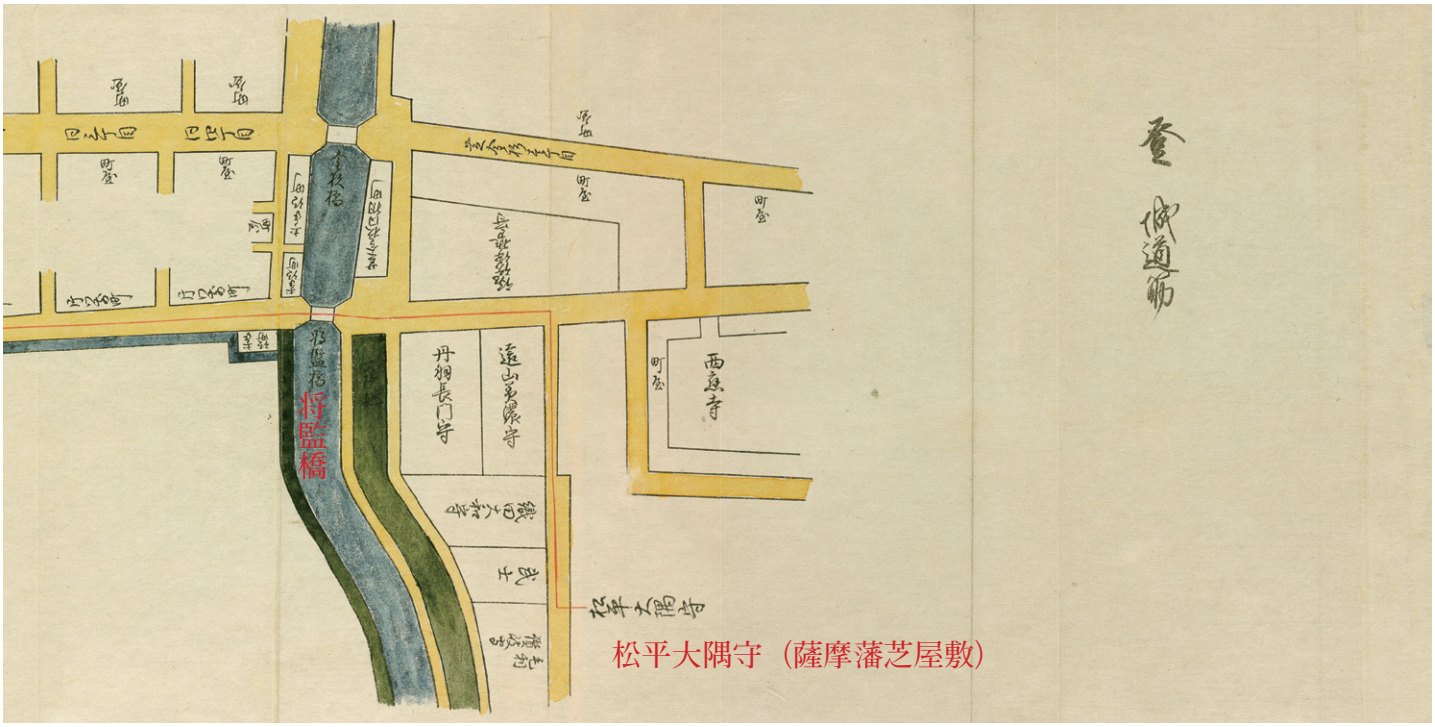
港区の麻布・新堀川より北の地区を描く。宇和島藩伊達家上屋敷は、表門を麻布龍土町（港区六本木７丁目）に接し、立泉寺・大円寺・法安寺という三つの寺院と向き合っていた。現在は法庵寺（法安寺）のみが残る。

3　参考絵図（1）琉球人道筋絵図





登　御道筋



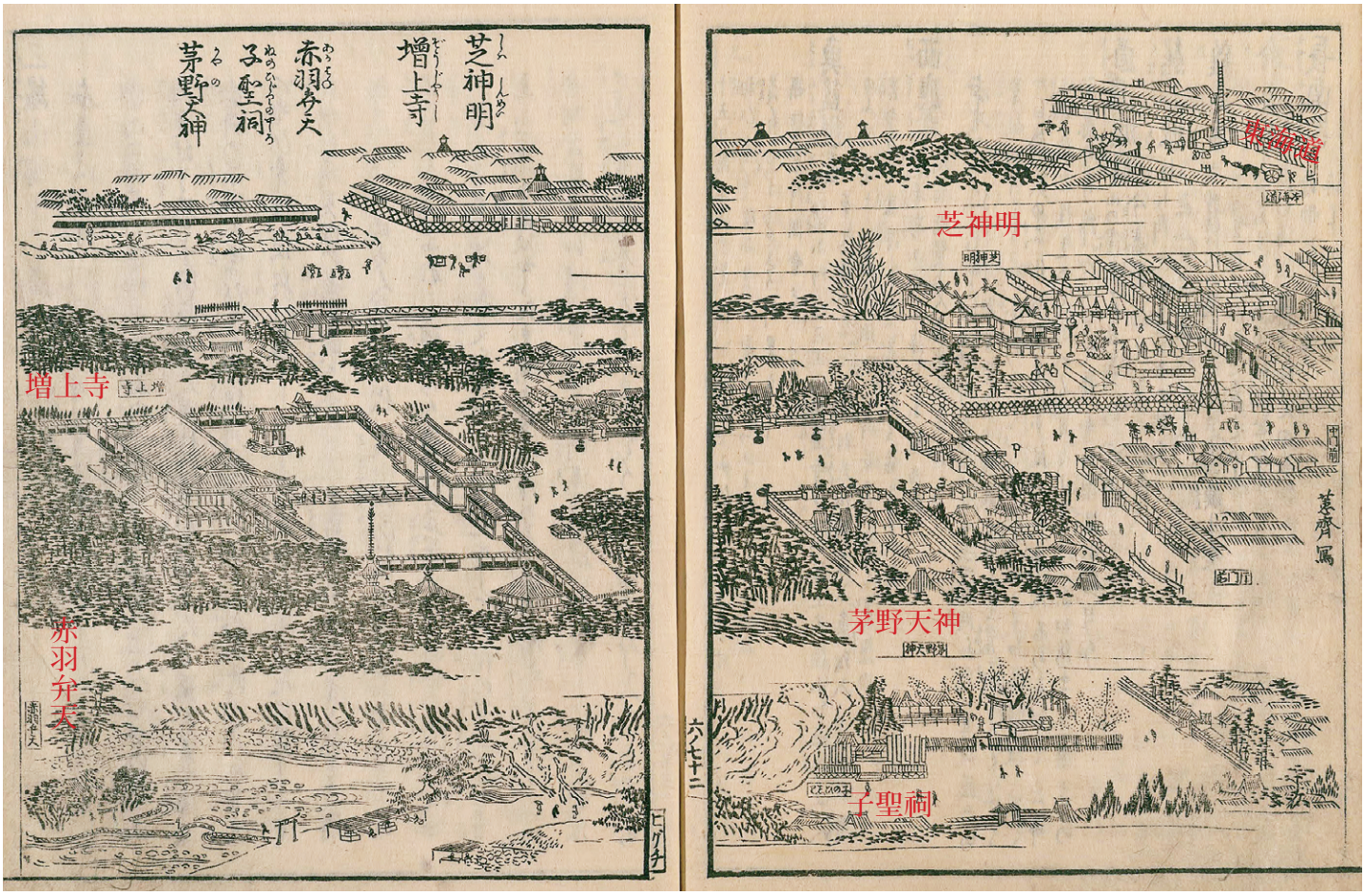
『琉球人道筋繪圖』1巻　天保13年（1842）写

（国立国会図書館蔵、デジタルコレクションより）［請求記号：819-90］

天保13年（1842）の琉球使節行列の登城ルートを示した図。上月行敬が描いた嘉永3年（1850）の琉球使節も同様のルートで登城したとみられる。国立国会図書館には同様の記録として、他に「琉球人道筋圖」（写）（年記なし、請求記号：819-1-237）も所蔵されている。

4　参考絵図（2）東海道名所図会

①芝神明・増上寺ほか（巻 6）

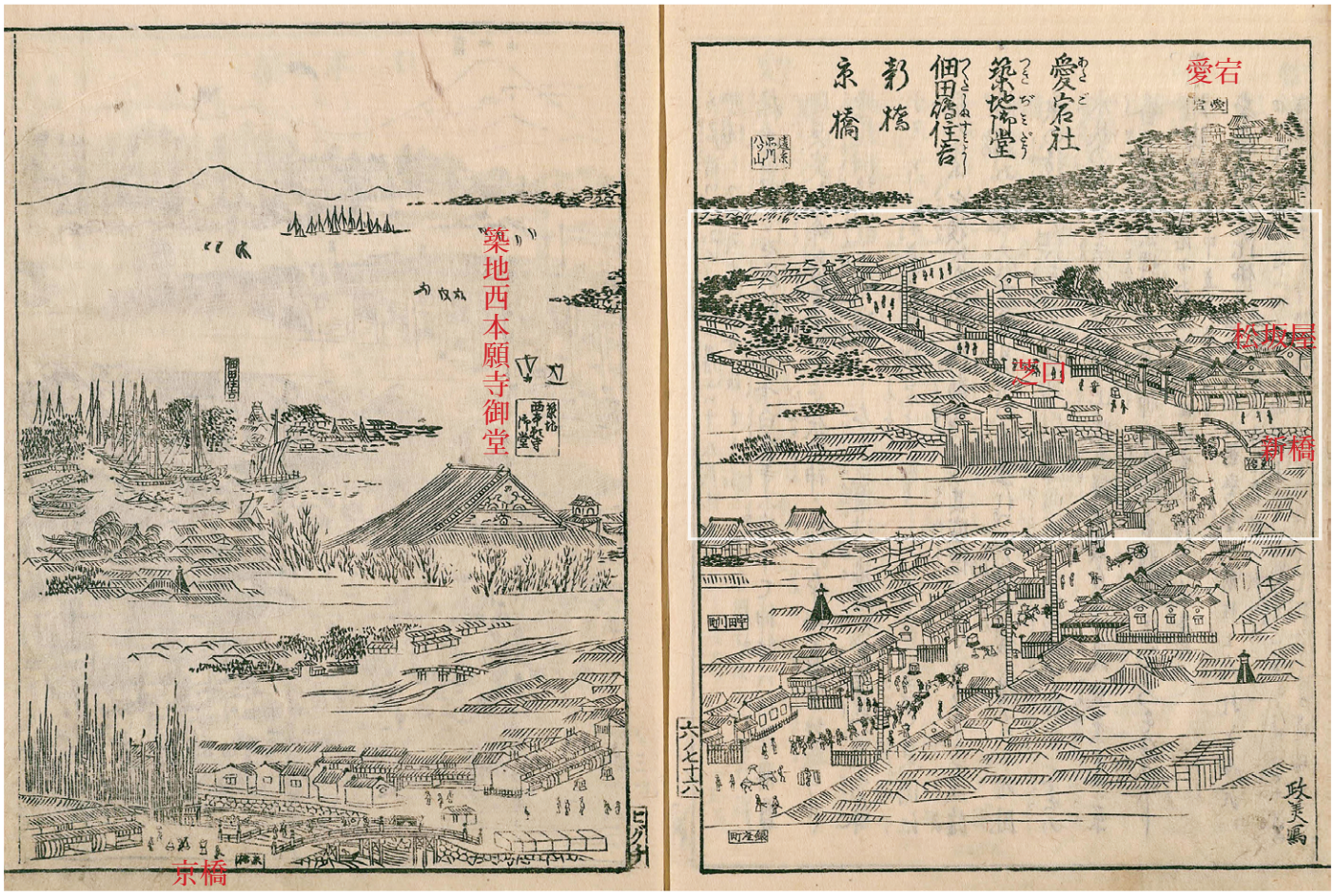


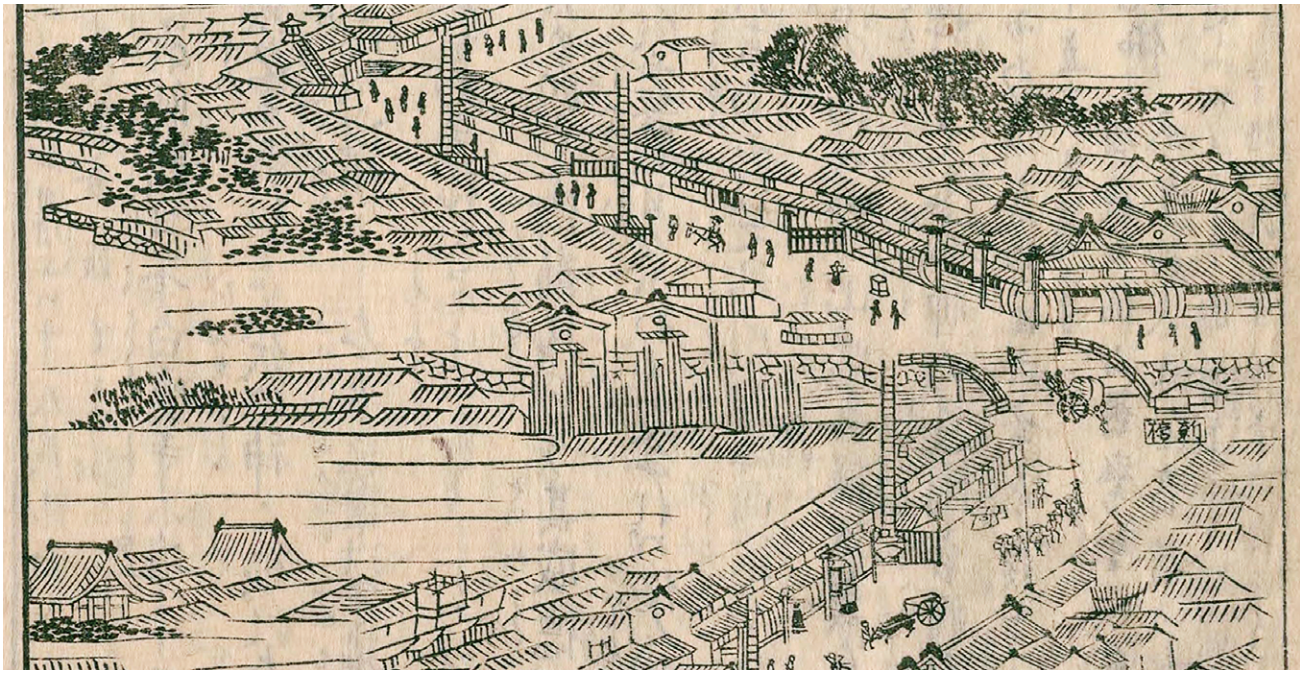
『東海道名所圖會』全 6 巻　秋里籬島編　寛政 9 年（1797）刊

（国立国会図書館蔵、デジタルコレクションより）［請求記号：140-71］

秋里籬島による名所図会シリーズの第 5 作目。絵師は竹原春泉斎・北尾政美ほか。京都で刊行された。京都から江戸に至る東海道の名所旧跡を絵入りで紹介する。巻 6 は江の島から江戸までを扱う。①は芝神明宮と増上寺を描き、そのそばを通る東海道が僅かに見える。②は京橋から新橋方面を描く。東海道沿いに並ぶ各町の境には木戸が設置されている。

②愛宕社・新橋ほか（巻6）

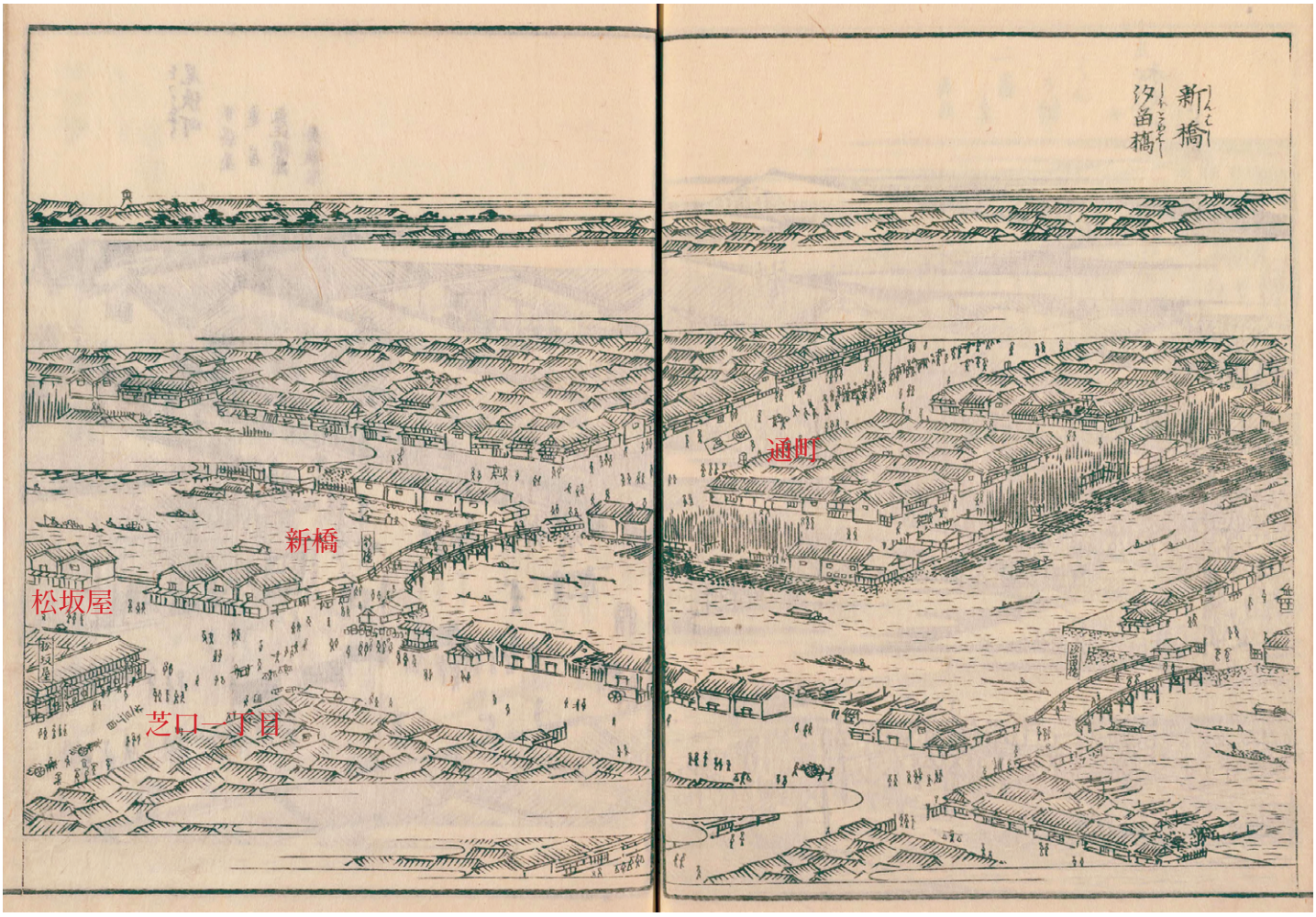


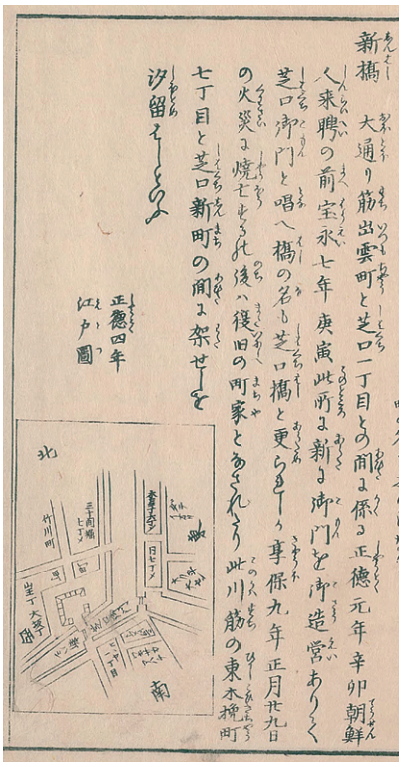


芝口・新橋付近拡大図

5　参考絵図（3）江戸名所図会

①新橋・汐留橋（巻 1）



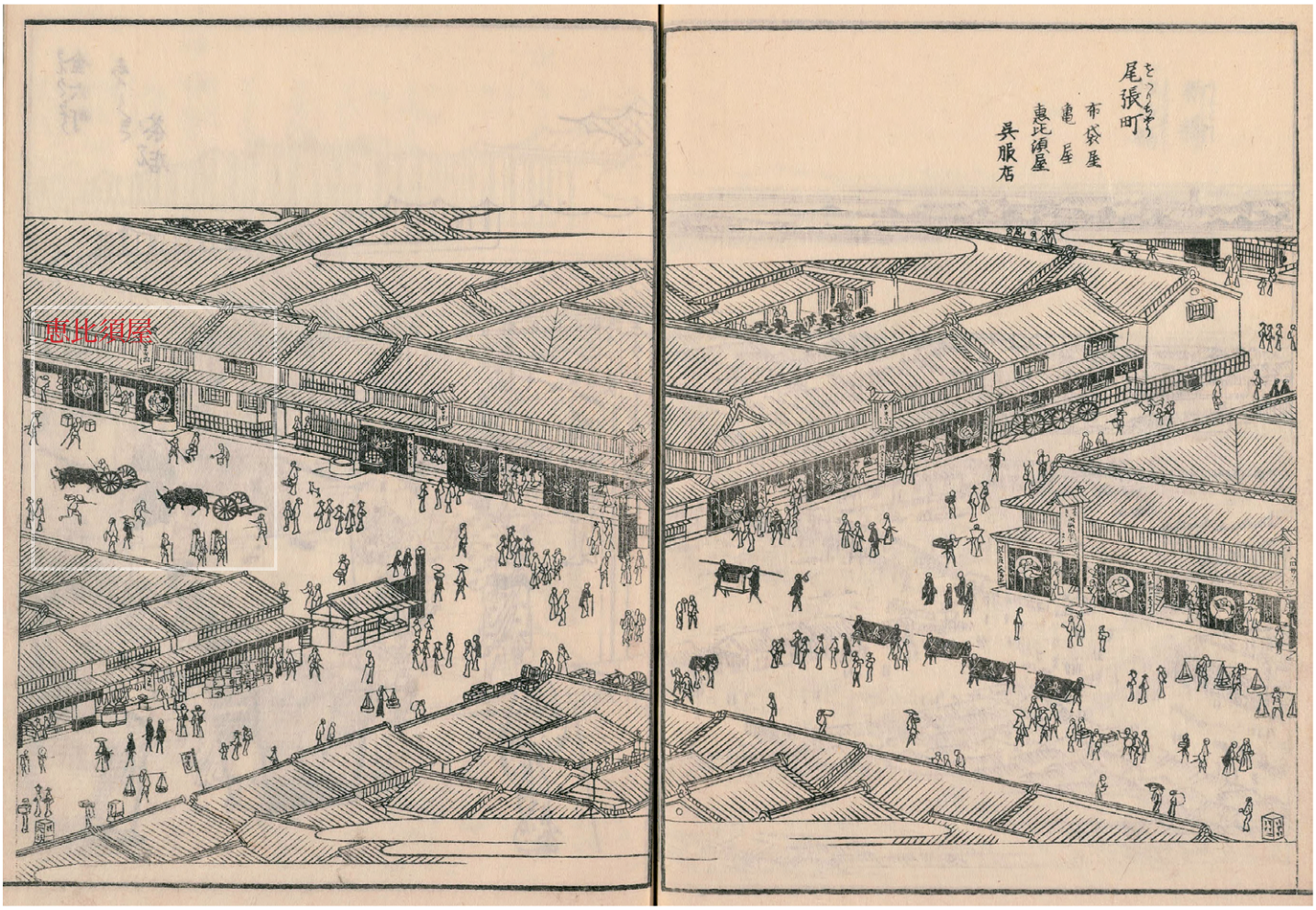


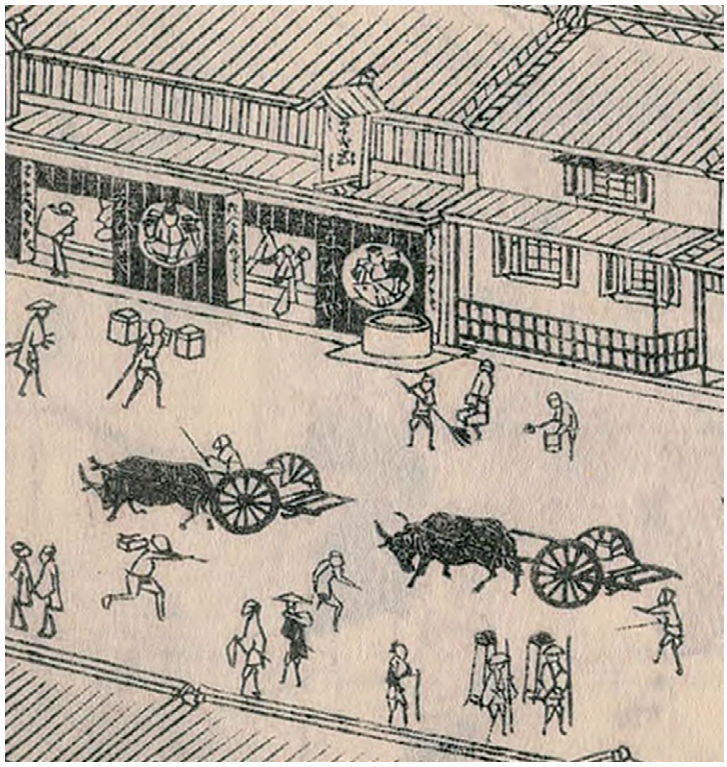
『江戸名所圖會』全 7 巻　斎藤長秋（幸雄）・莞斎（幸孝）・月岑（幸成）編　天保 5 年（1834）・天保 7 年（1836）刊

（国立国会図書館蔵、デジタルコレクションより）［請求記号：839-57］

江戸とその近郊の絵入り地誌。神田の町名主であった斎藤幸雄ら父子三代の編。画は長谷川宗秀（雪旦）。版元は江戸の書肆須原屋茂兵衛・同伊八。実地調査と写生に基づいて作成された。芝口一丁目に呉服屋の松坂屋が描かれている。右ページは同じく呉服屋の恵比須屋が描かれた尾張町。本書Ⅲ章『琉球人往来筋賑之図』では芝口に恵比須屋が描かれているが、実際は尾張町にあった。

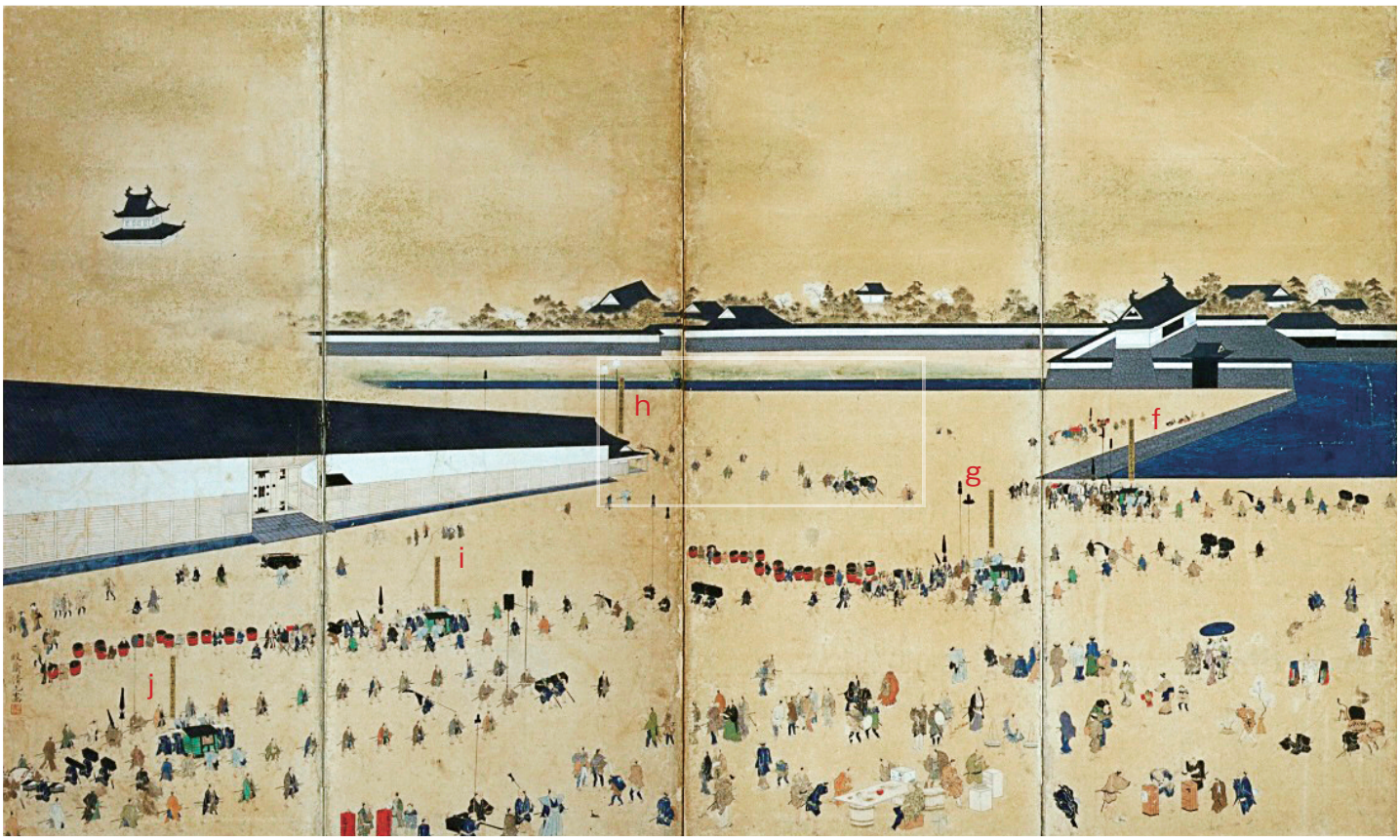
②尾張町（巻 1）：布袋屋・亀屋・恵比須屋　呉服店





恵比須屋拡大図

6　参考絵図（4）江戸城登城風景図屏風

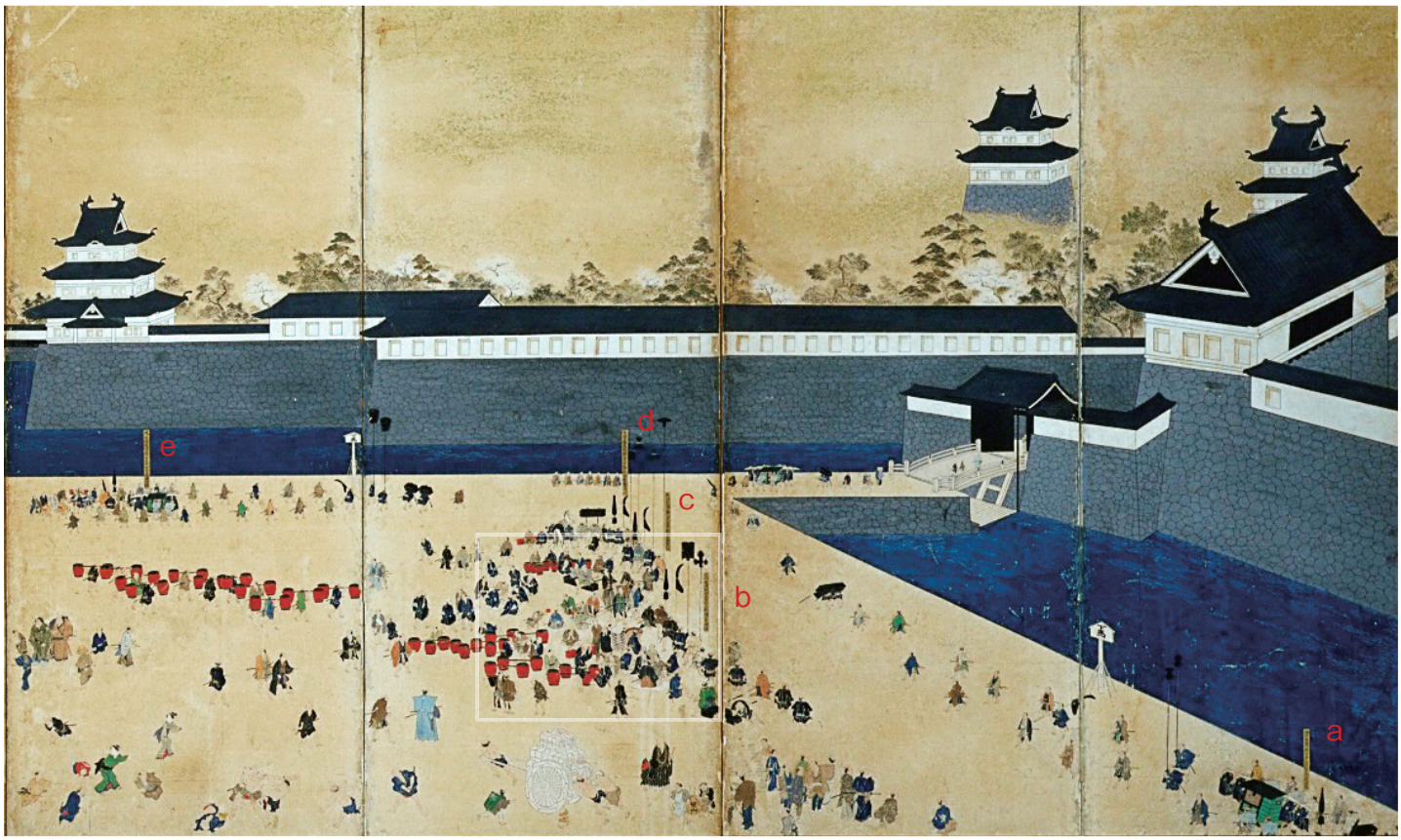


薩摩藩行列（h）拡大図（押札「薩州鹿児島城七拾七万八百石薩摩宰相様」）

『江戸城登城風景図屏風』　大須賀清光（画）　弘化４年（1847）成　八曲一隻 111.0×365.6 ㎝

（国立歴史民俗博物館蔵）［資料番号：H-1589］

江戸城への大名の登城風景を描く（以下、［国立歴史民俗博物館 2012：30-33］による）。会津若松の町絵師大須賀皎齋清光（おおすがこうさいきよみつ）の画。右端に内桜田門（桔梗門）が描かれ、堀沿いには「下馬（げば）」の札が建つ。ここで大名たちは従者を大きく減らして城内に入った。描かれている大名行列は、（a）岡山・（b）米沢・（c）長州・（d）広島・（e）福岡・（f）久留米・（g）鳥取・（h）薩摩・（i）松江・（j）仙台の各藩。薩摩藩の行列には藩主島津斉興の道具鎗「はぐま」（白熊）が見える（本書Ⅰ-4参照）。ほかに見物客や彼らを狙った振売や露天の商人も描かれている。大名登城行列は、琉球使節行列と同じく江戸の「名物」であった。



米澤藩行列（b）供待（ともまち）の拡大図

7　参考絵図（5）泥絵に描かれた琉球使節と江戸

①西の丸へ登城する琉球使節

部分１

部分２

部分３

①『泥絵　琉球使節江戸城西の丸登城図』　江戸後期　33.3×56.2 ㎝

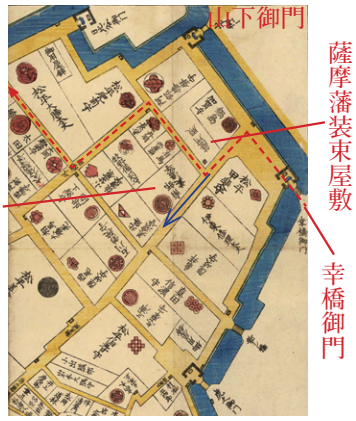
（江戸東京博物館蔵）［資料番号：97200006］

泥絵は、顔料に胡粉を混ぜた安価な絵具（泥絵具）や合成顔料のプルシアンブルーを使用した民衆的絵画。江戸時代末期に流行し、江戸の名所、特に大名屋敷が多く描かれた。琉球使節もまた「江戸の名所」であり、本図には、西の丸大手門橋を通って西の丸御殿に登城する使節が描かれている［平井･浅野 2004］。「中山王府」牌・張旗・路次楽・「飛虎」旗・正副使などに続き、使節の花形であった楽童子が手前に来る構図である。

②南部藩上屋敷前を通過中の琉球使節

部分拡大図

天保 13 年時の使節登城ルート
（国立国会図書館蔵、デジタルコレクションより「麹町永田町外櫻田繪圖」1860 年［請求記号：亥二-117］）



②『江戸山下御門内朝鮮人登城行列』　19 世紀　31.6×46.5 ㎝

（国立歴史民俗博物館蔵）［資料番号：H-1746-7］

江戸とその近郊および諸国の名所を描いた泥絵の組み物『江戸及び諸国名所泥絵集』（50 点）の 1 枚。タイトルは「旧題箋墨書」によるものだが、「飛虎」旗や「中山王府」牌から朝鮮ではなく琉球の使節を描いたものと特定できる。幔幕の家紋から、右側の建物は南部藩上屋敷（向鶴・割菱の紋）、左端の建物は薩摩藩装束屋敷であることがわかる。実際とは位置が逆だが、泥絵のなかには鏡に反射させて鑑賞するために左右逆に描かれたものがあり［平井・浅野 2004］、本絵図もその一つであろう。つまり、使節は薩摩藩邸前から南部藩邸の表門前を通り江戸城を目指していることになる（地図内青矢印）。登城道筋図が残る天保 13 年（1842）の使節は、南部藩表門前を通過していないが（本書Ⅳ-3）、回によっては本図のようなルートをとった可能性がある。

8　参考絵図（6）琉球画誌

①広小路桟敷（右・6丁裏〜左・7丁表）

②本町・京町・塩町・堀江町行列（右・7丁裏〜左・8丁表）

③行列見物（右・8丁裏〜左・9丁表）

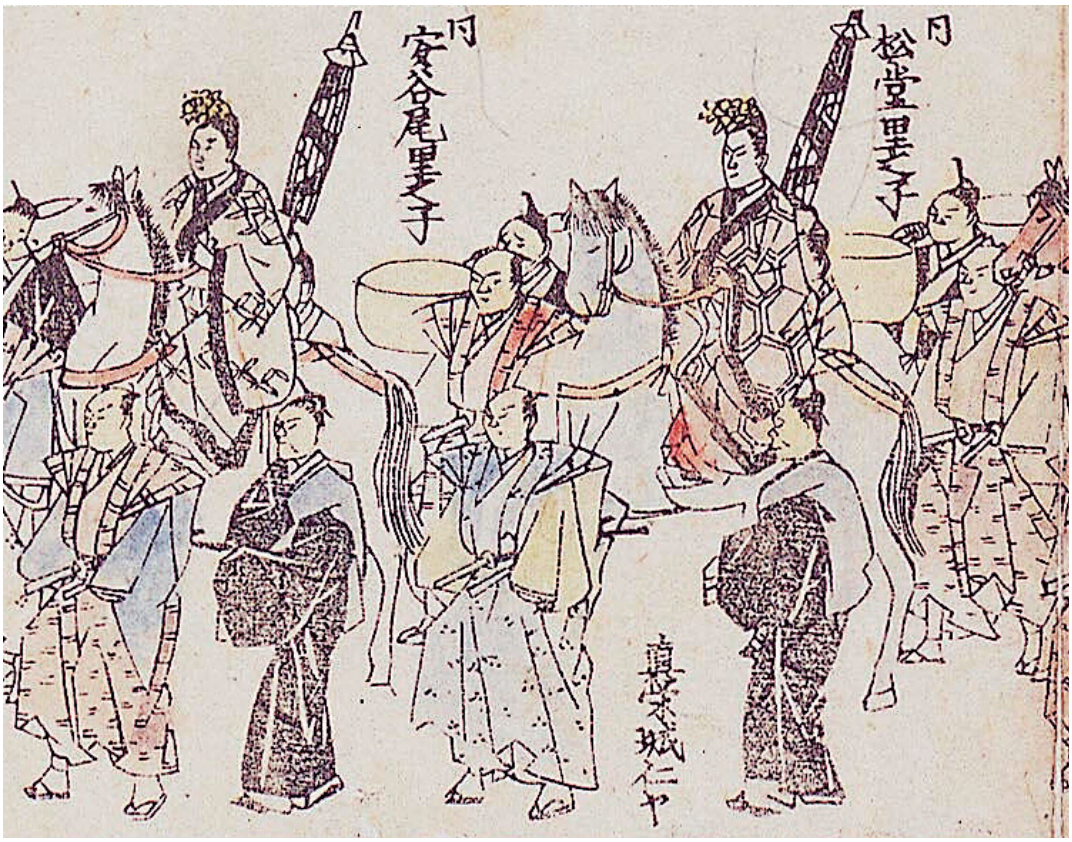
『琉球画誌』1冊　小田切春江　天保3年（1832）成

（財団法人東洋文庫蔵）［三-H-a-ほ-29］

尾張藩士の画家・小田切春江（忠近、1810-1888）の自筆稿本（以下、［横山1979］による）。春江は、同じく藩士の画家である高力種信（猿猴庵）に師事した。猿猴庵同様、貸本屋の大野屋惣八（大惣）のために多くの彩色絵本を描いた。本書もその一つで、綴じ際の下方に「大野屋惣八」と刷り込まれている。天保3年（1832）の琉球謝恩使が名古屋城下を通行する様子を、事前の準備状況から挿絵と文章によって記録したもので、行列を迎える都市の様子を詳細に伝える貴重な内容である。なお題名の「琉球画誌」は「琉球菓子」を言葉遊びにしたものである。

①は、丸太で作った柵内に設けられた桟敷の前を、琉球人の荷物が運ばれていく様子。桟敷は1人32文ほどで、見物人が隙間なく詰めかけたという。②は、屏風などで飾られた沿道の家屋内から行列を見物する人々。どの家にも見物客の桟敷が設けられたという。沿道には柄杓を添えた手桶が置かれ、行列の手前で男性2名が水をまき、箒で道を掃いている。琉球使節通過の際には「水を打ち手桶を各家の前に並べ置き、掃除を油断なくして、琉球人が通る少し前に水を打つ」と定められていたためである（『通航一覧』巻7「寛文十一年七月廿日御触」）。③書翰箱・せいばい竹・「中山王府」牌・張旗・路次楽……と続く使節と、それを見物する人々の様子。行列通過中は、道への立ち入りや往来、庇より前に出ること、指さし・高笑いなどの無作法は禁止された。

9　参考絵図（7）御免琉球人行列附



部分拡大図

『御免琉球人行列附』　歌川重久（画）　嘉永３年（1850）刊　24.0×90.0 ㎝

（沖縄県立図書館蔵）［請求記号 HK/200.8/G62/］

CC BY 4.0 一部改変（http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja）

寛延元年（1748）から行列を描いた商品としての刊行物（いわゆる「琉球物」）が、使節渡来のたびに繰り返し売り出された（以下、［横山 1987］による）。本行列図もその一つで、同じタイトルで寛政２年（1790）から嘉永３年（1850）までに６度７種が、江戸の異なる版元から刊行されている。「御免」は町奉行所の板行許可を得ていることを示し、右隅の外題の下には検閲をした町名主の双印（「衣笠」・「渡邊」）が見える。本図の版元は若狭屋與市で、木版・墨摺りの印刷物に後から彩色が施されている。使者の氏名は正確である。従者の服装や手巾などの描き方は、本絵引「琉球人行粧」と比較的近い。上月行敬がこうした「琉球物」を入手し、作画の際に参照した可能性は極めて高いといえるだろう。

10　参考絵図（8）琉球聘使畧

参考：『琉球賀慶使略』　天保 13 年（1842）刊

（沖縄県立図書館蔵）［請求記号：HK/200.8/R98/］

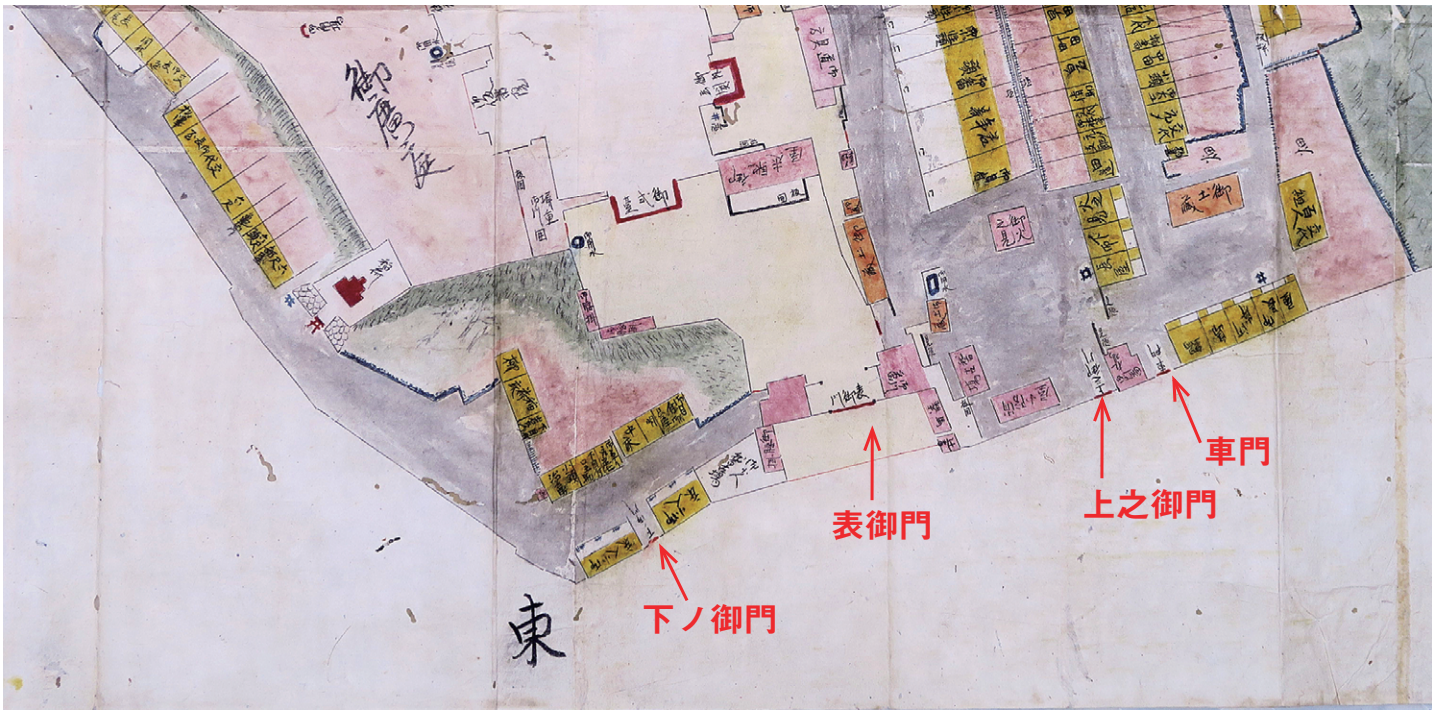
CC BY 4.0 一部改変（http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja）

『琉球聘使署』（りゅうきゅうへいしりゃく） 嘉永3年（1850）刊　39.0×53.0㎝

（丹羽謙治氏蔵）

ハワイ大学マノア校図書館蔵（宝玲文庫（ホーレー））の同じ資料には「不許路傍賣販／琉球聘使署／文華山房藏版」と刷られた包装が併存している［国立歴史民俗博物館 2012：106］。天保13年（1842）の「琉球賀慶使略」（左）に地図を加えて使い回したものか。なお地図は1719年（享保4・康熙58）に国王尚敬の冊封のため琉球を訪れた清の徐葆光（じょほこう）が1721年に著した琉球見聞録『中山伝信録』所載の地図の転用とみられる。

11　参考絵図（9）江戸麻布龍土御屋敷絵図



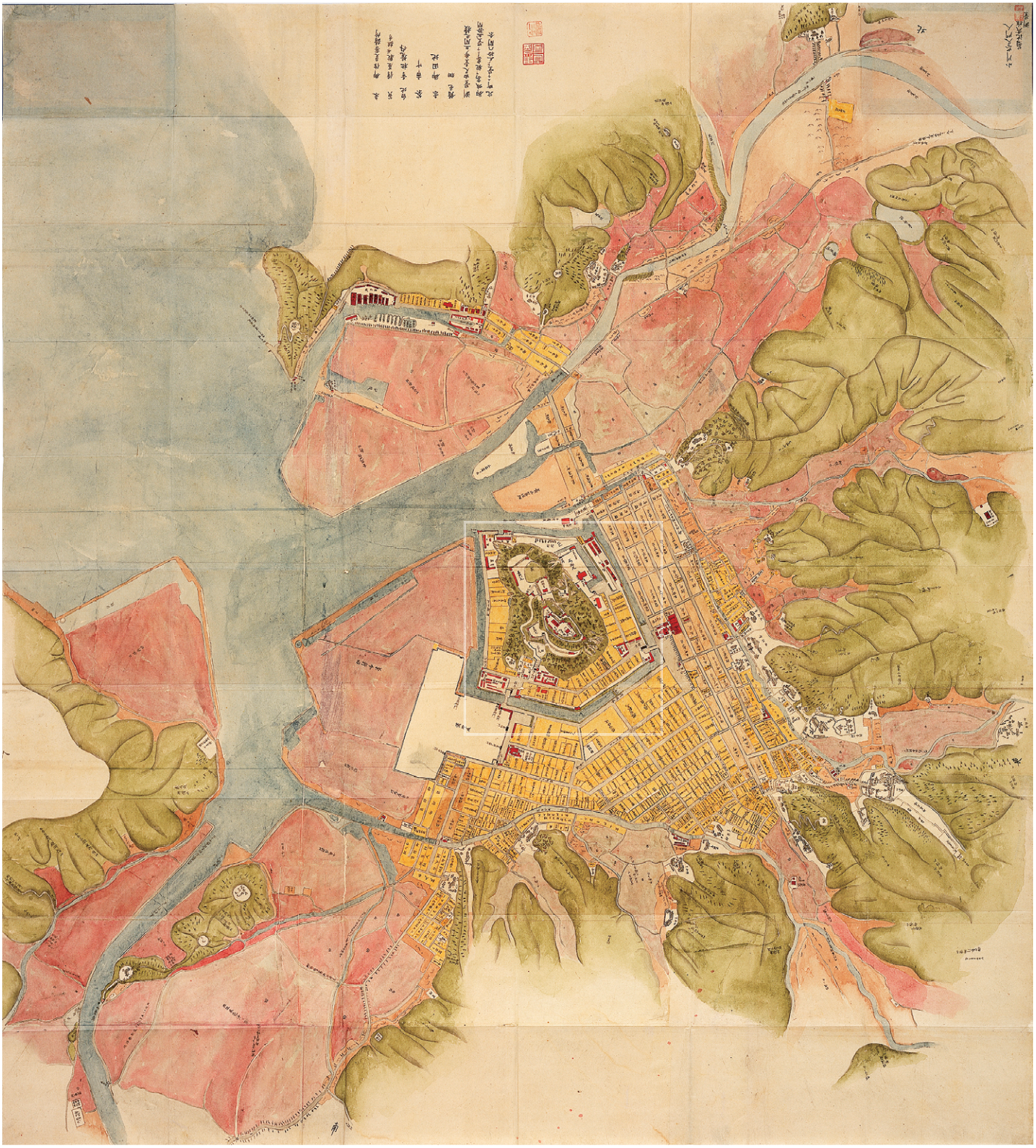
部分拡大図

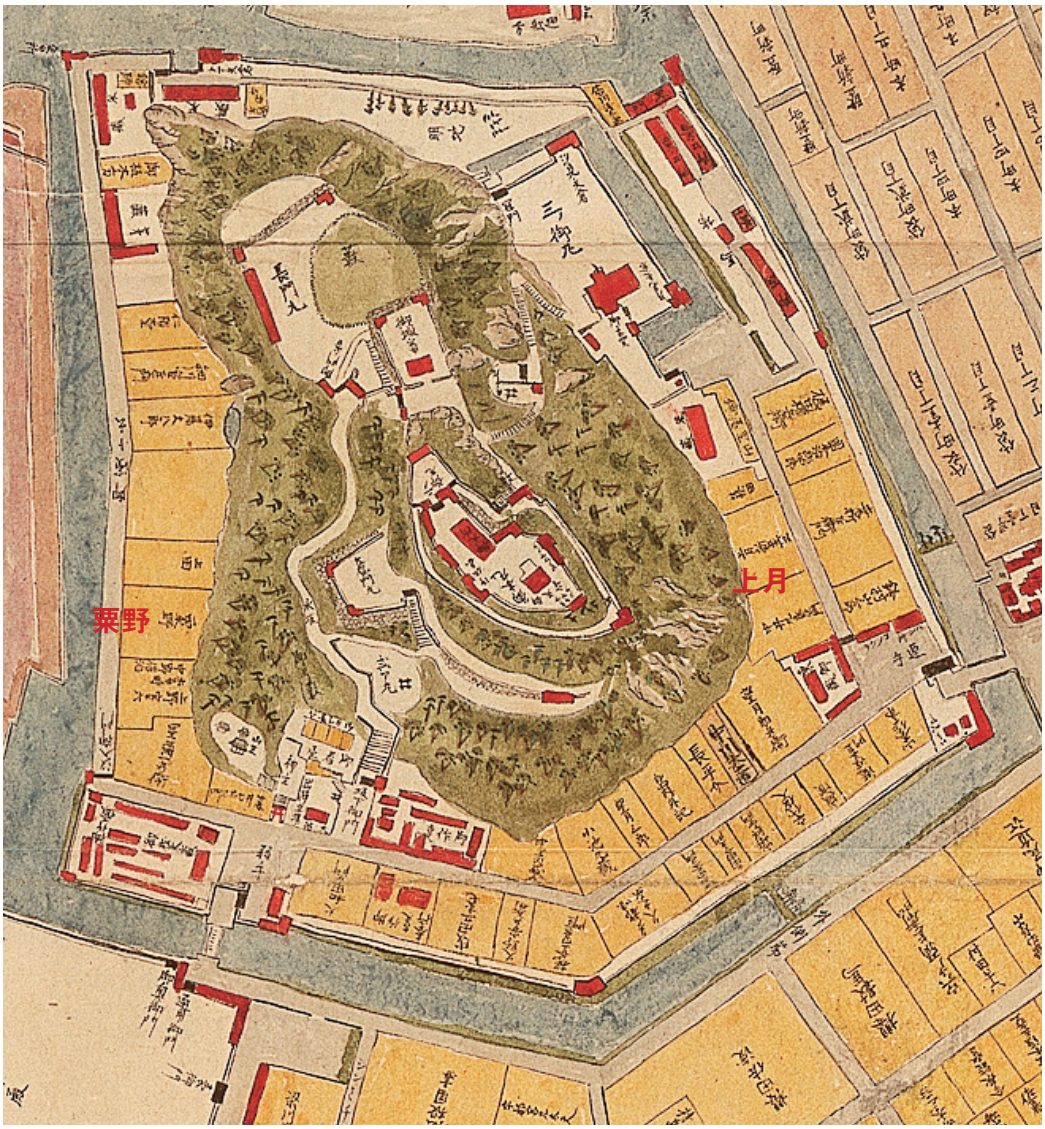
『江戸麻布龍土御屋敷絵図』　三浦義質（画）　嘉永５年（1852）成　100.0 × 91.4cm

（個人蔵）

江戸の測量家渡辺以親に入門し近代的な測量術を習得した三浦義質（みうらよしかた）が、藩主伊達宗城に命じられて作成した江戸麻布龍土の上屋敷の図面である。 本図の端に「嘉永五壬子三月吉日／伊達宗城公以命 三浦義質／以測量術撰之」とある。中央の白い部分が御殿で、その南側に「御廣庭」と「想海楼御庭」があり、それを囲むように藩士たちの住居（長屋など）が配置されている。上御門を入ったところに「御目付」「若年寄」「御番頭」「御小姓頭」「御家老」といった重役の住居が並ぶ。上月行敬はこの絵図が作られているまさにその時期（嘉永初年に江戸に在番したが、この重役の一角か、その北側に住居していた可能性が高いといえよう。井上淳氏も言うように、上月の描いた屋敷の正面の風景と絵図の情報が一致することで［井上 2018］、両者の資料的な価値はより一層高まる。

12　参考絵図（10）宇和島城下地図





部分拡大図

『宇和島城下地図』　幕末期 写　116.0 × 106.0cm

（愛媛県歴史文化博物館蔵）

本絵図は安政・文久年間の幕末の宇和島城下の状況を示した彩色絵図である。凡例に見えるとおり、朱色が「御作事普請所」（公設の建築物）、黄色が侍屋敷、白地が寺社、赤が「御田地」、錆色が畑をそれぞれ示し、凡例にはないが緑色は山林を、水色は堀、河川、海を示している。図の中央に五角形の堀割を廻らした区域に宇和島城があり、堀に面して侍屋敷が立ち並ぶ。拡大図で分かる通り、上月新五兵衛の屋敷と粟野の屋敷は宇和島城本丸を挟んでちょうど反対側の位置にある。屋敷の正確な規模は不明ながら、ほぼ同じくらいの広さをもっていることが見て取れる。